

保育科学生にみられる性格特性について

○光岡 攝子 光岡 征夫 栗栖 環子
(日本女子体育短大 保育科) (都立教育研究所 相談部) (東京大学医学部 保健学科)

1. 目的

平常、我々は保育者という幼い子ども達の教育にたずさわる者があまり片寄った性格の持ち主であることは好ましくないと考えている。それではどのような性格特性をそなえている者を「のそましい保育者」というのだろうか。又、保育科を卒業した者が実際に職場の同僚から又親からどう期待されるどのように適応しているのだろうか。

我々はまず第一段階として、現在保育科に在学している学生がどのような性格をもっているのかできるだけ正確に把握することを目的としていくつかの性格テストを実施し、それぞれのテスト上やテスト間の傾向について検討考察をくわえてみる。

2. 方法

被検者は日体女子体育短大保育科2年次学生。検査期間は44年4月～5月である。検査はパーソナリティの全面をより客観的に、ダイナミックにとらえることを意図して、質問紙法として妥当性の高いTPⅠ及び矢田部ギルフォード性格検査(以下YGとする)、投影法として描画テスト(HTP)を実施した。

YGは①性格特性をあらわす12の尺度、②これらの相互関係の深いものからなる6つの因子、③これらをプロフィール化することによってえられる5つの性格類型からなるもので、その個人のもつ全般的性格特性そのものをとらえるものである。
(四ノ角眼)

TPⅠは5つの妥当性尺度、10の臨床尺度から判定するもので、特に精神病的特徴としてつかむという点でより診断的色彩のこいものである。

HTPは家、樹木、人物の三つの絵をかかせ、そこにパーソナリティのより深い水準のものが投

影されるものとして興味深いものである。

3. 結果および考察

① YG検査について、YG検査の標準化において被検者となった女子大生1974名の資料と比較しながら保育科学生の結果を検討してみよう。

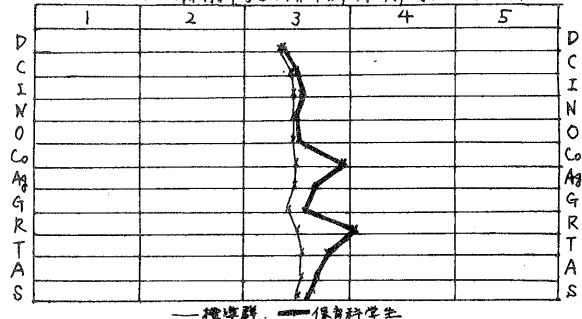
表1は保育科学生と標準群の尺度別粗臆平均を示したもの、図2は両群の粗臆平均によるプロフィールをあらわしたものである。

表1. 保育科学生・標準群の尺度別粗臆平均

尺度	標準 (n=1974)	保育科 (n=139)	有意水準
D	11.73 (5.25)	11.89 (5.03)	
C	10.33 (4.97)	10.63 (4.81)	
I	9.00 (5.38)	9.61 (4.89)	
N	9.76 (4.86)	9.80 (4.79)	
O	8.36 (4.06)	8.81 (3.99)	
Co	6.88 (3.81)	8.43 (4.15)	xxx
Ag	10.45 (4.20)	11.74 (3.87)	xx
G	10.70 (5.11)	11.30 (4.55)	x
R	9.10 (4.67)	12.01 (4.58)	xxx
T	8.08 (4.53)	9.31 (4.36)	x
A	8.42 (5.29)	9.28 (4.81)	
S	10.40 (5.28)	11.53 (5.00)	

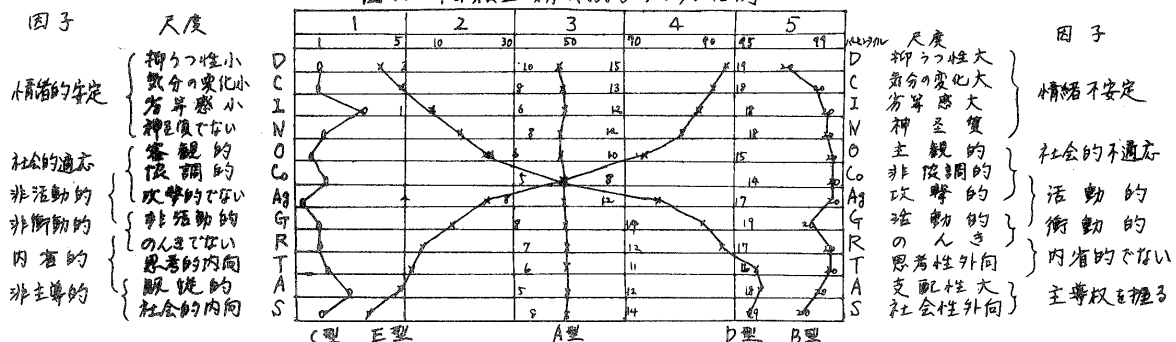
有意水準: x 5%, xx 1%, xxx 0.5%, () 内は標準偏差

図2. 保育科学生・標準群の粗臆平均によるプロフィール



情緒安定因子(D, C, I, N)の4尺度は両群の平均値間に有意差は認められない。一応情緒的に安定しているといえる。社会的適応因子(O, Co, Ag)は保育科学生はかなり高く(Coは0.5%, Agは1%水準で有意)や、協調性(Co)にだけ攻撃的(Ag)であるといえる。主導性因子(A, S)では主導性を握る

図1. YG検査の構成およびプロフィール例



方向に、衝動性因子(G.R)では衝動的方向に、内省性因子(R.T)では内省的でない方向にそれぞれ片寄っている。(Rは0.5%、G.Tは5%で有意)つまり活動的(G)で支配性(A)が大きく、のんき(R)で思考的(T)にも社会的(S)にも外向的であるといえる。

次に性格類型について検討してみよう。表4に示した通り最も多いのは平均型(A)の30.9%。次に安定適応積極型(D)の28.8%。不安定不適応積極型(B)の23.0%。不安定不適応消極型(E)の14.4%。安定適応消極型(C)の2.9%の順となっている(図1参照)D型、C型、A型をあわせた62.6%の学生は一応問題のない性格傾向といえるが、E型、B型の37.4%は問題である。(その傾向が明確でない混合型をのぞいても29.4%いる)

以上YG検査からみると、保育科学生は情緒的に一応安定しており、活動的で積極的に物事にとりくむが、やや協調性に欠け、攻撃的であり、約3割の学生が不安定不適応型といえる。

② TPIについて

各尺度の平均値は表2及び図3に示す通りである。Dp.Hc.Hy.Ob.Asが低くMa.Paが高い。Liが高いことからテスト時に学生が自分を好ましくみせようとするや、防衛的態度でなかったかと推測されるが、一応これからあまり神経症的傾向、反社会的傾向はなく、関心の範囲が広く、活動的で明るく、平直、几帳面、自信のあるタイプということがいえよう。また、各尺度の解釈から問題とな

表2. 各尺度の構成と平均値

尺度	構成	平均値
安 当 性 尺 度	Nr 疑問度	4.92
	Rr 妥当性度	2.52
	Ut	2.24
	Li 虚構度	6.13
	Cr 修正度	2.88
臨 床 尺 度	Dp うつ病尺度	11.57
	Hc 心気症	13.65
	Hy ヒステリー	11.26
	Ob 強迫神経症	20.08
	Pa パラノイア	12.12
	Hb 精神分裂病	11.23
	As 反社会的傾向	12.59
	Ep 不安感	6.23
	Ma 軽躁病	11.16
	In 社会的同姓	16.83

図3. 平均値のプロフィール

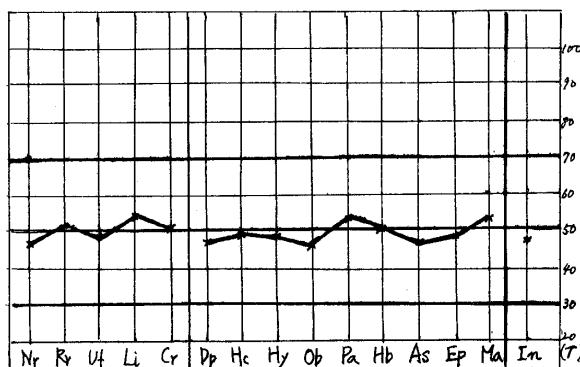


表3. TPI問題者の内訳

schizophrenic tendency	8	} 39 (28.0%)
neurotic	17	
depressive	1	
epileptic	4	
antisocial	4	
hypomanic	5	
妥当性問題者	16 (11.5%)	
計	55 (39.5%)	

③ YG, TPI及びHTPについて

YG及びTPIの関連は表4に示す通りである。YG, TPIも共に(+)の者は19.4%。YG, TPI共に(-)の者は42.4%。どちらか一方で問題となる者38.2%であった。さらにHTPとの関連でみたのが表5である。三種のテストでいずれも問題となる者7.2%。いずれでも問題にならない者28.1%である。従って精神的にさわめて問題といえる群は1割弱。さわめて健康な群は3割弱といえる。

表4. YGの性格類型とTPI

		TPI(+)	TPI(-)	計
安定 適応	積極 (D)	典型 2	5	7
		準混合型 4	14	18
		混合型 5	10	15
	消極 (C)	典型 0	1	1
		準混合型 0	2	2
		混合型 0	1	1
平均 (A)	典型 3	6	9	
	準混合型 5	3	8	
	混合型 9	17	26	
不安定 不適応	消極 (E)	典型 4	1	5
		準混合型 5	5	10
		混合型 2	3	5
	積極 (B)	典型 4	4	8
		準混合型 10	8	18
		混合型 2	4	6
	計	55 (39.5)	84 (60.5)	139

表5. TPI, YGとHTPの関連

		HTP(+)	HTP(-)	未検査	計
1群	TPI(+) YG(+)	10	11	6	27
2	TPI(+) YG(-)	13	10	5	28
3	TPI(-) YG(+)	7	11	7	25
4	TPI(-) YG(-)	11	39	9	59
		41	71	27	139

表5の1, 2, 3群でHTP(+)となるのは約半数であるのに4群では8割がHTP(-)であることからYG又はTPIとHTPの相関はかなり高いとみられる。一方TPI(+)でもYG(-), TPI(-)でもYG(+)の者があり、TPI, YG共に(-)でもHTP(+)の者がいることは、それぞれのテストがそのテストのもつ特性から性格の異なる面を把握していると考えられ、三種のテストを組合せてみることは意義があると思われる。

各性格テストで問題となる者に対して精神病的、教育的にどのようにcareしていくかはこれからの問題である。そして更に今後の課題として、入学時にとらえた性格特性や保育者としての意識が大学の教育期間に、更に就職後にどのように関連し、変容していくか追跡し、のぞましい保育者像を追求し、同時に保育者の適応を規定している条件は何か考えていきたいと思う。